



天ネブ

札幌天文倶楽部会誌

2005 57_号

お便りコーナー



おはようございます

今年も残すところあと3日。色々なご準備でお忙しいことと思います。どんな年末をお過ごしですか？ 風邪などひいていらっしゃいますか？ 私の体調も

まあまあになりました。ご心配をおかけしました。ただ、体力が落ちすぎ...ずっと寝ていたの。回復するべく頑張ります！ それはそうと、ようやく観楓会のレポートをまとめました。こんな年末、大変おそくなって申し訳ありません。今年も結局、ご迷惑の掛け通しでした。本当にお世話になり、有難うございました。来年もまた宜しくお願いいたします。では、お元気に新年をお迎えください。美香さんに宜しくお伝えくださいませ。失礼します。

佐藤 麻子 umibuta-dolphin-kick@jcom.home.ne.jp
受信日時：2004年12月29日 09:28

渋谷朋代が来る

2004年12月27日(月曜日)の15時に川崎在住で帰省中の末澤朋代(旧姓：渋谷)さんが二人の子供を連れて遊びに(顔を見せに)来ました。彼女、もすっきり母親ぶ



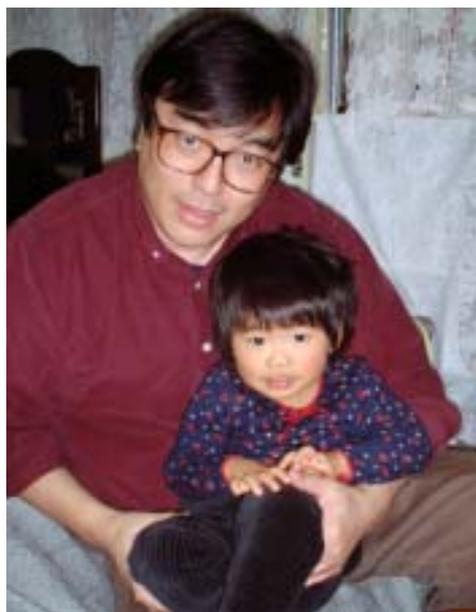
左が長男の末澤壮太郎君で右が妹になる紫乃(しの)ちゃん

りがいたについて、独身時代の男勝りのバイタリティあ

ふれた姿が嘘のようです。

しっかりスペースシャトルの模型をもらって歡ぶ子供は、渋谷の子供らしく良い感じに育っていました。

特に下の子(紫乃ちゃん)が父親似で、俗に言う“みったくなしメンコ”で可愛いのです。



末澤紫乃(しの)ちゃんをあぐらの上にダッコする。子供嫌いの会長「メンコイなぁ〜」と一言

会報デネブ第56号いただきました

帰宅した私は年賀状を楽しみにしていましたが、その中にA4の封筒を見つけて凄く嬉しかったです！ なんだか“お年玉”を貰ったみたいです。ただ、垣内さんの忘年会のレポートが載っているのかと思いましたが、流石にそれはなかったようです。ハハハ...。次回の麻子さんの陸別レポートと会長の九州レポートとともに楽しみにしています。今回は久しぶりに川口裕美さんの陸別感想文も読んで面白かったです。それではまた。今年もよろしく願います m(__)m

= 追伸 = 今夜は遠い路がありますが、もちろん見るんですよね？ (笑)

中島由美子

受信日時：2005年01月02日 17:58

会報が届きました

明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。今日1月2日、会報が届きました。毎年、1月2日は郵便配達はお休みなのに、今日配達されてびっくりです。本当なら、今頃旦那の実家(北見)にいるはずでしたが、年末から子供と私が風邪を引き、行けなくなりました。子供は蓄膿症&急性中耳炎になり、今も鼻水ダラダラ。しばらく耳鼻科に通わなくてはなりません。私は、うがい・手洗いをしてうつらないように頑張っていたのに、大晦日の夜に高熱を出してダウン。毎年聞いていた除夜の鐘を聞けず、水枕の上でもうろうとしたまま新しい年を迎えてしまいました。今も、ちょっと動くと熱が上がるという状態です。では、渡辺さんもお体に気を付けて良いお年をお過ごし下さい。

川口裕美 ZUA07552@nifty.com

受信日時：2005年01月02日 23:12

新年のご挨拶

編集委員 今野 利 秋
ご無沙汰しており申し訳ありません

28日から4日まで帰省していましたが、旭川に無くなるプラネを見に行くなどしており、今年は顔を出せませんでした。札幌の科学館もミノルタにデジタル化を取られ、もう一年以上も番組も入札できていません。世の中の流れとはいえ、寂しい限りです。番組を利用したの帰札も難しくなりました。マックホルツ彗星は年末一度双眼鏡で見ました。今日は快晴ですので、屋上で見て見ます。

矢吹さんですが、2年位前に八王子から引越しをしたのですが、社内に住所を公表していませんので、自分も知らない状況です。矢吹さんは明後日まで据え付けに出ており、メールを見ていないので返事が遅れるかと思えます。この秋の組織改変で、矢吹さんは再びコンテンツに戻って来ました。仕事は余り変わらなさそうです。

今年は海外への遠征は無理だと思えますが、国内はどこかきれいな星空を見に行きたいと思っています。2006年の皆既日食までもう1年と3ヶ月くらいになりました。ドイツに参加したメンバーも溝口さんが2年前に結婚するなどの動きがありましたので、リベンジに参加は難しかと思います。渋谷さんともこちらではまだお会いしていません。最近、とみに昨年是一年のたつのがとても速かったです。今年も速いのかと思えますが、2006年に向けての準備(金銭的と社内根回し)をポチポチ始めようと思えます。

昨年は科学館や天文台などの人と一緒に理科教育の問題を考えるワークショップの実行委員をやるなど、外部との出会いが増えました。学生団体が科学館で開くイベントをオブザーバー的に支えて、広報を天文雑誌に行うなどもしました。これはあくまでも仕事とは無関係で、個人として行っています。草の根という奴ですが、最後に科学館や博物館が活況を呈し、プラネタリウムなどが活発になる事を願っていますが、まずはその土台作りです。プラネタリウムが活発になれば、会社に利益をもたらす事に繋がります、給与が増えないか？という浅はかな欲望もあります。勿論、純粋に宇宙や天文に一般の人が興味を持ってくれれば、というもあります。近年、公的施設の民営化が進み、科学館も例外ではないです。ここ数年のうちに、業界全体でのガラガラポンが起こりそうです。つぶれる館も出てきますし、専門の職員を取るところも増えてくるかと思えます。そうなれば、別に会社だけにしがみ付いている必要なんてないな、と最近思っています。この辺は、独身の強みです。

個人的には、住福祉環境コーディネーターの3級、生涯学習インストラクター1級などを取得しました。これで食べていけるわけではないですが、外部と個人として何かやるときへのアピールだったりします。

年に2回ほど、社員の息子さんが通っている学校に観望会を開きに行っています。1等星くらいしか見えない場所なので、皆と星を見た、という思い出が大事なかな？と思ってやっています。昨年は面白いところでは、静岡県伊豆高原にある東急系のリゾートホテル(会員制。会員権が200万円!)で夏休み休暇の宿泊客相手の観望

会と星空講義をしました。講義といっても、パワーポイントで作った資料をプロジェクターで映しながら、40分くらい話すものです。30人くらいの参加者があり、終わった後で質問を受けました。講義の内容は「星を見に行くには」。今まで星を見た事のない人に、「東京からでも車で1時間いけば天の川が見られる」という事を伝えるものです。もしかすると、今年も夏にあるかもしれません。昨年はこのホテルでの観望会のあと、知人が迎えに来て、甲子園へと行って、駒大苫小牧の決勝戦をナマで見えました。優勝するとは思っていませんでしたから、すごい感激しました。もう、3塁側が見知らぬ人どうして一帯となつての応援。自分の母校、旭川北も出場したので、昨年的高校野球はとても気になりました。

他には、出張で貯まったマイルを利用して、2年連続で八重山に行った事でしょうか。1昨年は3泊4日で、石垣島、竹富島、小浜島、本島的那覇と強行軍で回りました。入社した年の部の旅行で行って以来、実に11年ぶりの沖縄。9月末に行って真っ黒になりました。主に星に関する史跡や「ちゅらさん」のロケ地などを見てきたのです。ちょうどモノレールの「ゆいレール」が開通したばかりでした。空港から直通で、市内を観光するには便利。地元の人でもこれまで鉄道が何10年もなかったのが、切符の買い方や自動改札の使い方がわからなかったり。アナウンスで、改札を通った後は切符をお取りください、と使い方の説明していたのが印象的です。このモノレール次の駅を紹介するとき、駅毎に違った沖縄民謡が流れるんですね。白い砂浜、夕暮れ時の独特の空の色、高く上るさそり座。特に竹富島の赤瓦の屋根は新鮮でした。

昨年の八重山第2弾は、石垣島をベースに、黒島、鳩間島、波照間島、与那国島を回りました。黒、鳩間は、豊年祭りという伝統行事を見に行きました。文字通りその年の豊年を祝う祭りで、多くの舞踊が奉納されます。なかでも、ミルクが出てくる舞踊は八重山の文化がわかって面白いです。ミルクとは弥勒のことで、白い弥勒の面を被った人が辺りを歩くのですが、沖縄地方にはこのミルクを信仰する文化があります。ハーレー船と呼ばれる船を若者が漕いで、二艘で競争をするのも見ごたえがあります。波照間は民間の人が気軽に行ける土地としては日本最南端の地。最南端の岬から見る海の青が深い事！群青色の海が広がっているのを見ると、「向こうはフィリピンか。昔、黒潮に乗った日本人の祖先が渡って来たんだなあ」と感慨もひとしお。椰子の実の歌詞を思い浮かべていました。

与那国は名実共に日本最西端の地。今ではドラマ「ドクターコトー」のロケ地として有名です。あいにくと与那国は天気が安定せず、たまにスコールが来ましたが、このスコールが「南にやってきた」と感じさせました。そのため、日本で一番最後に沈む夕陽や、台湾を望む事は叶わず、今年もリベンジか？と考えてます。実はこの旅を決めてから、昨年11月に放映された「ドクターコトースペシャル」の制作が決まり、自分が滞在中にロケがあり、帰りの最後の飛行機で泉谷しげる、小林薫と一緒にした。

念願の西と南の端を踏めた事で、最北端(稚内)、最東端(納沙布)とすべて制覇できました。でも、旅というのはそれくらいで、以前みたいにいろいろと見て歩く機会と時間が減りました。なんやかんやと土日にも仕事が入られてしまったりしたのです。でも、結果的に代休が増えて、社内でワースト3位。働いていてワーストはないんじゃない？という気がします。最近、社員全員の

代休と振り休の残りを張り出すんです、1ヶ月ごとに更新されて。現在、代休+振り休 150日、これに有給休暇が残 44日……。異常です。週 5日ですから旗日を無視しても、39週休めるのです。およそ 9ヶ月……。

そこで、今年は、今まで仕事が忙しい事などを仕方ないと思っていましたが、少し、自分のための人生を生きるという路線変換を行おうと思います。休みの日は休む。それで終わらない仕事は知った事じゃない！ それで終わらない仕事は請けない！ で、もうちょっと旅をする。人生、男が 70年と短めに計算して、今年私は 35歳。折り返し点なのです。仮に一年に 1県を旅しても、残り 35年の人生では 35都道府県しか回れない！ これは、結構大きいです。

この通り行くかどうかは不明ですが、このような決意表明とともに新春の長いメールを終わらせて頂きます。とりとめがなくなり申し訳ございません。

今野利秋 t0611kon@goto.co.jp

受信日時：2005年1月5日



由美子の写真コーナー

今年最初の話題と言えば、何といても年明けに明る



くなると予想されたマックホルツ(C/2004Q2)彗星でしょう。年初から天候が優れず、月明かりの影響のなくなる 3日以降ずっと気になっていましたが、5日になってやっとその姿を撮影できました。日高の絶好的环境下では肉眼でスバルのそばにポーッと蘭玉のように浮かぶ彗星が確認できました。写真では真っ直ぐ伸びるプラズマの尾と扇状に広がるダストの立派な尾が写っています。

スバルのそばを通過した頃が地球に最接近したもので、それ以降 9日の撮影ではプラズマの尾が極端に短くなり、その姿も急激にしぼんでいるようです。天頂付近に位置するため双眼鏡でも写真のように“へ”の字”状の尾を確認することができました。昨年 の 2大彗星同時出現と騒がれた、“ニート”と“リニア”彗星のニート彗星並かそれ以上の姿を見ることができました。

ほうき星(彗星)というのは、日々変化する姿はそれっきりの現象で再び見ることはできない訳ですから、毎回、尾やコマの状態が変化してゆくのは、本当に見ていて飽きないですね。彗星って何て面白いんでしょう。



【表紙写真説明】マックホルツ彗星(C/2004Q2)

2005年1月5日 18時30分 露出2分 (f300mmF2.8) フジファインピクス S2pro ISO1600 設定

【左写真説明】M45に接近するマックホルツ彗星

2005年1月5日 18時45分 露出2分 (f105mmF2.8) フジファインピクス S2pro ISO1600 設定

日高富川海岸にて 渡辺和郎

【上写真説明】M45に接近するマックホルツ彗星

2005年1月9日 18時37分 露出2分 (f180mmF2.8) フジファインピクス S2pro ISO1600 設定

日高門別町豊郷にて 渡辺和郎

<阪野テクニカル工房 大観楓会>
2004年10月 陸別遠征 秋の星空観察会 改め
- 台風接近の中、強行 -

日 程：2004年10月9日(土)～10月11日(月・祝)

場 所：陸別町 銀河の森コテージ

参 加：一日目より参加 渡辺会長・渡辺美香・佐藤智秀・佐藤麻子

二日目より参加 阪野文昭・川口裕美

佐藤 麻子

10月9日(土)

社長不在のプチ観楓会

「何でいつもこうなんだ？」

出発前夜、いつもの夜間観測用の暖かグッズであるダウンジャケットやホカホカパンツ、ばばシャツや80デニールの毛玉ができてしまったタイツ等を荷造りしながら、心の中は空しかった。100%の確率で、3日間とも晴れる見込みは無いのだった。しかも渡辺会長からの電話の、「ま、テクニカル工房の観楓会、ということで。あっはっは...」という、笑い方が空回りした声。さぞかし意気消沈し、美香さんがなだめるのに相当骨が折れたことだろう。

9日、平岸の佐藤家を8時40分に出た。サーフ1台で4人一緒にしゃべりながら行く予定で、荷物がまた増えるというのに後ろが見えず、既にバックミラーは役立たずだった。途中、ガソリンスタンドに寄って渡辺会長宅に着いたのは、9時10分位だった。渡辺家の荷物を積む準備をしていたところ、曇りの天気の為あまりパツとしない表情で、渡辺会長が下りてきた。「面倒くせえ...2台で行くべ。積むスペースも無いだろ」と言うと、佐藤智秀は妻の麻子と2人きりになるのが余程怖かったのか、「大丈夫ですよ、一緒に行きましょうよ」と強く誘ったが、渡辺会長は「いい、もう面倒だ、行くぞ!」と言って振られ、2台の車で“ひばりが丘のビッグハウス”に買出しに向かった。

し、しかし、時間がまだ早く、お店は開いていなかった。それを切っ掛けに「やっぱり車1台で行くか」ということになり、渡辺会長宅にUターン。平岸から積んできた望遠鏡やペースメーカーの一式を渡辺会長に預かってもらい、2台分の荷物を減らしてサーフに詰め込んだ。渡辺会長には珍しく、まだやる気が出ないようで、「三脚、佐藤さん持ってんだらう？じゃ、その1本ありゃいいな。よし、いい、いい...」と、自分の三脚はサーフには積まなかった。渡辺会長宅を出発したのは9時40分、4人が乗り込んだ車1台の長距離ドライブは、珍しい旅になりそうだった。

相変わらず台風が接近中で天気は悪く、空は灰色一色。渡辺会長は「倶楽部の行事の時は、何でいつもこうなんだ？」と、誰にととも無く叫んで訴えている。でもすぐに、「ってことは、俺たちだけでなく、北海道の人はみんな晴れた空を見られないってことだなっ？」と、自分を納得させていた。そして自分を落ち着かせる為か、自宅か

ら持ってきたバナナを「佐藤さん良いだろ良いだろ。食べたいか？」と、見せびらかしながら一人で食べ、国道274号線を走る車の中をバナナの香りで充満させていた。

「やかまし夫婦漫才で～す」

渡辺会長とお会いするのは久しぶりだった。6月8日の金星の日面通過以来だろうか。その間、宮崎に行ったそうだが、“軍鶏”というお店の「チキン南蛮」という料理がすこぶる美味しかったそうだ。そして、佐藤車のカーナビを見て、美香さんは現地での夫婦喧嘩を思い出していた。何でも、借りた車にカーナビが付いていて、それに2人とも振り回されたい。美香さん「そっちだっ(カーナビが)言ってるしょ。会長「うるせえ、こっちだ」。美香さん「ほら違う。だから言ったしょ。会長「うるせえな、助手席でゴチャゴチャ言うな!黙ってる。カーナビもお前もあっち行け。こっち行けって、うるさいぞ!」と言う感じだろうか。車の中のように手が取るように分かる。まるで夫婦漫才だ。

どちらがボケか突っ込みか、お互いに「相方がボケに決まってる」と言いそうだが、手元に来てしまっているのは美香さんか？喉飴を食べようとした時、包みからはみ出した飴を、ドジョウすくいよろしく「おっと」と床にポロリと落としたのだ。すると美香さんは、「おっ、生きてる生きてる、新鮮な飴だなぁ～。見～た～な～」と恨めしい顔をして言いながら、口の中へ飴を入れた。やはり美香さんがボケ役か。

国道274号線(通称：石勝樹海ロード)は、行楽車が多いのか70キロ平均で車がつながっており、思うようには進まなかったが、遠くに見える山が色づいていて、いよいよ観楓会らしくなってきた。そして美香さんが「ねえねえ、ナベちゃん、紅葉綺麗だねえ～」と渡辺会長に言うと、自分が今まさに考えていることしか頭にないようで、「うん、分かってる」とそっけない返事。「いやぁ、そんな冷たい言い方しなくてもいいじゃな～い」と美香さんが言い返し、一触即発？大介・花子みたいに掛け合っているような本格的な夫婦喧嘩を、こっそり覗いて見たくなった。

依然、のどかな景色が続いていたが、そんななか渡辺会長が牧場を発見。その看板を見て、「あっ、牛」と、まるで運転中のパパに向かって言っている子供のように指して叫んだ。すかさずママは、いや美香さんは、「運転手に話しかけるんじゃない!」と叱った。すると反抗期の息子は、「曇っていて空の話題を話せないんだ、他に観るもの無いんだから仕方ないだろ!」と足をバタバタさせながら言い返す。夜も晴れる見込みが無いから、苛ついているのか。仕方が無いから土幌から足寄に抜ける

所にあった鹿肉料理の小さなお店で、小休止を兼ねてソフトクリームを食べさせることでなだめた。(渡辺会長にご馳走になったのだが...).

夢のニュージーランド移住

ソフトクリームで満足しない渡辺会長は、11 時になると小腹が空いたのか、「何かねえか...」と言い出した。仕方が無いので「福屋」の“大福もち”を出してあげた。美香さんの厳しいチェックの目がありながらも、2 つペロリと平らげた。これでお昼まで、お腹はもつだろう。

お腹が満足した渡辺会長は、矛先を佐藤家に向けた。佐藤智秀・麻子が以前旅行したニュージーランドのことを「ニュージー、良いですよ～良いですよ～」と、ことあるごとに言うものだから、またその話になり、「佐藤さん、やっぱりニュージーに移住しろ。後で追いかけて行くからよ。なっ」と言い始めたのだ。移住するには、ニュージーランドの銀行口座に2千万円入っていないければならず、そうしたいのは山々だが「そんなお金無いですよ～」と反論。すると、今度は「オヤジさんいなくなったら入るだろ」とのたまった。「そんなもん入ってこないし、勝手に殺さないで～」と言ってももう遅い。「佐藤さんがニュージーの広い土地に家建ててよ、その隣に俺たちが引っ越すから、ヨロシク頼むわ」と、こう出る始末。しかも「神島が向こうでペンションでもやってよ...」と勝手に計画を立て始めた。佐藤麻子は「嫌だ！ 亭主は釣り三昧で、切り盛りするのは結局私だ！ 目に見えてるもん。私だって遊びたい！」と猛反対。今のところ実現する見込みが全く無い架空の話で、両家の喧嘩勃発だ。

もう、ニュージーランド移住の早期決行を、渡辺会長が諦めたと思ったその時、美香さんが穿り返す切っ掛けの一言を放った。「そう言えば、佐藤さんたち、車ひっくり返ったのによく無事だったよね～」と言ったのだ。その同じ年の「しし座流星群観測アリゾナ遠征」には、さすがに行けなかったのだが、佐藤麻子は、「私は腕の骨を折った智さんと違って、耳切っただけだから、一人でも行けたけど...」と呟いた。するとすかさず渡辺会長が、「もしも、その事故で佐藤さんが死んでたら、神島に保険金がガッポリ入ったんだな。それで移住できたんじゃないか？」と、保険金殺人の甘～い誘いを囁いた。そう、その手が有った。しかし、もしも私の方が死んでも亭主に保険金が入るわけで...、むむ、それは嫌だ。一人でホクホク顔でニュージーに移住させる訳にはいかないのだ。

殺すか殺されるかの壮絶なバトルが勃発。仕掛け人は、間違いなく渡辺会長だ。そして黒幕は、その後は車の中で「帯広に住みたい！ 沖縄に住みたい！ ニュージーに住みたい！」と次々駄々をこねて騒いでいた、女マフィアの黒幕は渡辺美香。これ、“間違いない”。

仲良し四人組

昼過ぎ、曇りの日勝峠を越え、4 人を乗せた車は重たい体に鞭打って走り続け、帯広市の中心街にやってきた。帯広中心街の「六華亭」の駐車場に車を止め、お菓子の買い物は後回しにして、図々しく店内を通過し交差点の歩道に置かれた鹿の像とともに道外からの観光客よろしく記念撮影をし、「ふじ丸デパート」に向った。

13 時過ぎの昼食を摂る為、デパ地下にあるはずの「は



六花亭のある中心街の鹿オブジェの前で記念撮影

げ天」に直行した。その食料品売場の地下階は、土曜日ということもあって賑わっていた。しかし、目指す店が渡辺会長の記憶している場所には見当たらなかった。以前来た時とようすが違うと思ったが、改装されたようだった。もしかしてその時に潰れてしまったか？「あっちじゃないの？」「いやこっちだ」などと渡辺夫妻がやり合い、結局店員さんに聞いてみると、なんのことはない、儲かったので広い場所へ移動しただけだった。こじんまりした店内に落ち着き、4 人仲良く昼食にありついた。渡辺会長と佐藤智秀は天丼で、漬物と味噌汁付き 650 円也。美香さんと佐藤麻子は豚丼で、漬物と味噌汁付き 714 円也。豚は炭焼きをしていたし、肉も柔らかくなかなか美味しかった。心太のように客が押し込まれ押し出され、しかも味噌汁も何も付かない有名店「ばんちょう」に行かなくても、ここで充分だった。



帯広といえば、天ぶらの「はげ天」が有名

その後、デパ地下で買出しをしようとしたが、野菜などが余りにも高値で、もったいないということで近くのスーパー「ポスフル」で食材を買うことにした。駐車してある六華亭に戻ったが、その通り道である裏玄関前に面白い看板がたっていた。よく見ると、「仲良し4人組」というパネルが設置されている。「これって、俺らのことか？ よしよし、こりゃいいや。写真撮るべ！」と仲良し？ 4人組(カメラのシャッターを切るために1人欠けたが天)の記念撮影。そして駐車料金代わりに、六花亭で銘菓「醒醐」と「くりきんとん」を買って、ずうずしくも無料のコーヒーをチャッカリ頂いた。

14 時くらいから「ポスフル帯広店」で買出し開始。夕食・朝食・そして2日目の晩の「阪野テクニカル工房大歓楓会・七星会」のための食材を選んだ。野菜・肉・納豆など、いつものパターンでカゴに入れていったが、



仲良し四人組の看板前で記念写真。本当に仲良しなの？



どこの六花亭支店でもコーヒーが無料サービスなのは有名だ

鮮魚コーナーが意外と充実していて、威勢の良いおじさんがいたりして、その一角だけ市場のようだった。それにつられて、「うーむ、美味しそうなかじかのアラだ...カジカ汁にしよう...、イカも美味しそうだな、イカ刺しも食べよう」と、仲良し4人組で真剣に食材を選び、夜は天気が悪くて星は望めないという前提の、食べる気満々の買出しになった。

社長不在の夕食会

15時位にポスフルを出て、16時半には陸別町銀河の森コテージに到着した。人の良さそうなおじさんが相変わらず管理人で、「畑に大根が有るから、お土産に何本でも好きなだけ抜いて持って行きなさい~」と声がかかり、折角のご好意なので美香さんと2人で大根抜きをすることになった。見事な太ーい大根だった。その大

根を背負い鍵をもらって今回お世話になるコテージ「さそり座」に向った。毎年来ていると勝手知ったる何とかで、思わず「ただいま~」と言いたい気持ちになる。



見事な“大根”が何本も...

荷物を運び込み、一瞬だけ一休みをして夕食準備を開始した。先ずお米をとぎ、アラの下ごしらえをし、野菜を切って早速煮込み始める。味付けは、「アラ汁も作ろう」と言った佐藤智秀に責任を取って担当してもらった。煮込みをしている間に、イカの刺身をつくり、次の日の七星会で焼いて食べる為の下足などのゴロ漬けを作った。こうして美香さん・佐藤夫婦の3人が台所に並んでバタバタと作業をしていると、妙な歌声が...。振り向くと、大きな図体で「まだかなまだかな~」と子供の振りをして可愛く歌いながら台所を覗く渡辺会長だった。「大人しくお行儀良くして待ってなちゃい!」と一括し、作業を続行した。

アラ汁も美味しそうに出来上がり、食卓にはイカ刺しや牛蒡サラダやたくあんなども並び準備が整った。19時から社長不在の「阪野テクニカル工房ブチ観楓会」と名打った夕食会を開始した。先ずは茹でたての蕎麦を佐藤家定番の梅おろしタレで、ズルズルっと一斉にすすった。「うん、旨い!」と言いながらも、倶楽部の行事とは思えない4人だけの静かな食卓だった。しかし、こういうのもたまには良いか? と思いながら、活きの良いイカ刺しやアラ汁を目の前に箸を休ませることは無く、食欲は旺盛だった。黙々と食べながらも人数が少なく静かなためか、渡辺会長の観察眼が目の前に座っている佐藤夫婦に向けてキラリと光った。佐藤麻子がお蕎麦をすすっていると、会長「神島は何だかお上品に静かに食べるな~、俺と佐藤さんはクツチャクツチャ音を出して噛んで食べるけどよ」とチェックが入った。「う...そんなこと無いで



佐藤・渡辺両家の静かな夕食を自動シャッターでパチリ

すよ...」と思ったが、自分のことはともかく、考えてみると佐藤智秀は、食べる時に日頃からよくクチャクチャと音をさせているかもしれない。たまに「うちの旦那は猫か？ 猿か？ どっちだ？」と思うことが有るのを思い出した。要するに品がないということを書いたかったようだ。渡辺会長の間人観察を分散させるためにも、2日目から参加の阪野文昭さんと川口裕美さんが来るのが待ち遠しかった。

鍋にアラ汁を残したものの、その他のご馳走は平らげ、皆な満腹状態で「プッハー」とお腹を摩りながら椅子にふんぞり返った。そして重たくなった体を引きずって仕方なく後片付けをし、社長不在の「阪野テクニカル工房プチ観楓会」の夕食会が、線香花火の最後のように静かに終了した。

熱き戦い勃発、舌戦

後片付けも終わってホッと、食後のデザートになった。六華亭で買ってきたお菓子を食べながら飲むコーヒーの準備を佐藤智秀がし始めたが、渡辺会長に「六華亭の無料コーヒーの方が美味しかったりして。フッフッフ」と茶化され、「何を言うんですか！ そんなこと無いですよ！」と言い返せる...はずも無く、淡々とお湯を注いでいた。コーヒーを巡る渡辺会長と佐藤智秀の熱き戦いは回避され、取り合えずお菓子をつまみながら、カップを温めて待っていた。しかし、そのお菓子が問題だったのだ。「醍醐」は皆な普通に食べたのだが、秋の限定品「くりきんとん」が問題だった。佐藤麻子が「美味しいですよ～」と言って食べると、渡辺会長が「まずい！」と言って一口かじって箱にポイと戻したのだ。「これが美味しいの？」と疑うので、佐藤麻子は「変なもの入ってなくて、渋皮入りの栗の味しかななくて、甘ったるくなくて美味しいじゃないですか！ 和生菓子というか茶巾絞りというか...、売り切れるほどの人気商品ですよ、関係ないけど」と思っきり言い返し、栗きんとんの戦いが勃発した。しかし、「まずい、ダメだ」と会長は受け付けない。素材自体の味にはうさそうな渡辺会長だが、お菓子となると甘くないとダメなのか？ もしかして瓶詰めのお菓子の甘露煮が好きなのか？ こうも激しく否定されると、人の味覚の違いに改めて感心した。横で聞いていた美香さんは、「まずいまずいってうささいね！ 上品なお菓子が口に合わないだけなんじゃないの?!」と、必至にフォローしてくれていた。

栗きんとんの戦いが集結し、話はプロ野球へ及んだ。いつものように、プロ野球選手の年俸の高さが問題になった。「あいつらはもらい過ぎだ」「ストをやる前に自分たちの年俸を減らせばいいんだ」等々、小市民の意見で盛り上がる。そして、使い切れない程稼いでいるイチローに矛先が向った。「奥さんは栗山秀樹と付き合っていたのに、稼いでる方を取った」と言う話に改めて女のしたたかさに感心した。そして、渡辺会長が「メディア関係者には日本から来たただの猿だって、差別されて言われてるらしいぞ」と発言すると、佐藤智秀の下がり眉がピクッと動いた。そして「いや、でも大リーグであれだけの活躍してますから、認めざるを得ないでしょう」と、スポーツに関することは譲れないらしく、言い返した。すると渡辺会長「だから！ その筋の奴らが言ってるんだって！」と、元々大きな声を更に張り上げてやり返す。渡辺会長 vs 佐藤智秀のイチローをめぐる熱き戦いのゴングが鳴り響いた。佐藤智秀「でも、マリナーズが最下

位でも、イチローの記録達成を観に来る客で球場が満員になってるんですから！」。渡辺会長「だから、あんな人種差別の国で、黄色い猿がやって来た位にしかなってないんだって」。佐藤智秀「でも、選手たちだってアメリカ出身の白人なんて数えるほどですから、関係ないですよ」渡辺会長「だから、その筋では猿だって言われてるっつうの！ 1」.....という具合に延々と言い合いは続く。まっ、その筋の人も偏った考えの白人かも知れないし、佐藤智秀はイチローの力を絶賛しているので、この頑固男同士バトルに終止符が打たれるわけはなかった。どのように収まったかも覚えていない。ただ単に「うるさい！ 声でかい！」とずっと思っていた。

頑固男同士のバトル中に、テレビでは「ダイハード3」が放送されていた。一年のうちに3部作の内の一つが、必ず放送されている。ダイハードシリーズの悪役たちは、テロリストを語る単なるこそ泥だったりする訳だが、3作目もそれに違わず盗もうとしている金塊がゴッソリと登場する。それを見ていた渡辺会長が「あの金塊が一本大体1千万か？ 2本有ったら2千万か。神島、ニュージーに移住できるぞ！」と、また本人無視の架空の移住計画話が始まった。だが、魅力的なのは事実で、「あの金塊が2本有ればいいのか～」と乗ってしまった。すると「やっぱりペンション経営だな」ときた。「だから～、それは～、一番忙しい時間に旦那が釣りにしに遊びに行ってしまうから嫌ですって！ 私だけ忙しいんだから」と言い返し、昼間に引き続いて架空の話で同じような会話のバトルが繰り返された。

夕食後にバトルが続いた後、眠たそうだった美香さんのお休みタイムになった。ふと時間を見ると22時20分で、美香さんにとっては遅めの就寝か。バトルに付き合っ、相当疲れたのではないだろうか？ 「もう、皆うるさいわね！ 何が仲良し4人組よ！ 解散するわよ！」とは言わなかったが、「おやすみ～」と言った美香さんの目の大きさは、いつもの半分になっていた。佐藤麻子は映画が終わった後にお風呂に入ったが、上がってみると渡辺会長が大人しくテレビにかじりついていた。「DVDに録画予約してきたけど、野球延長で放送時間がずれてしまったんだ。くそっ絶対見なくちゃ...」と喋って真剣になっているのは、NHKの韓国ドラマ「美しき日々」だった。韓国ドラマにはまっていない佐藤家には全く理解できない内容で、渡辺会長の近くにいた佐藤智秀は、渡辺会長が親切にしてくれる登場人物の説明を「はー...はー」と、なま返事で聞いていた。彼はきっと、同じ時間帯に放送されていたサッカー中継を見たいな～と思っていたに違いない。きっと、「くそっ、サッカー気になるな、でも、渡辺会長にはかなわないしな...仕方ないか...でも、ドラマの説明されてもチンブンカンブンだな...でも、もう待つしかないか...。我慢我慢...」と自分自身の心と戦っていたに違いない。そんな、仲良し4人組解散の危機を乗り越えたようすを確認して、佐藤麻子は、1時頃2人より一足先にベッドに潜り込んだ。

10月10日(日)

これぞ観楓会

またその話？

次の日の朝、何となく目が覚めると6時30分だった。誰かがシャワーを浴びている音がしていた。きっと渡辺会長だろう。亭主の智秀は5時頃釣りにいそいそと出かけたし、急ぐ旅でもないし...、美香さんもいるし、という甘えで、半分だけ開けた顔をまたしっかり閉じた。次に目覚めたのは7時45分。曇ってはいるが明るい朝で、コテージの中には渡辺会長の元気な話し声が響いていた。

身支度を整えて一階に行き、「オハヨウございまーす」とまだ半分寝たような目で挨拶をすると、渡辺会長は、もうすっかりお目々パッチリ、シャワーを浴びた髪はフサフサだった。佐藤麻子が「たまには自宅以外の所で目覚め、朝をのんびり過ごすのも良いもんだなあ」と思いながら、窓の外を眺めてまどろんでいると、「このロッジ、建てると幾らくらいなんだろう」と言う美香さんの声をした。ん？何やらまた、行って欲しくない方向へ進みそうだ...。そして「ビックリするほど高くはないだろう。ロフト式だし、結局地下から上まで吹き抜けみたいで家中に声響くしなあ」との渡辺会長の回答。佐藤麻子は「一番響かせているのは、あなたですから〜！」と、心の中で思っていた。そしてついに「ま、こんなコテージでもニュージーに建ててよ、なっ、神島、俺が使ってるから」と、のたまった。や、やっぱりこう来たか。「だからー！何度も言うように、今の状態でも分かるように、亭主は忙しい朝食と夕食の時間に釣りに出かけるんだってば！嫌じゃ！」と前日に続いて同じ会話。ペンション経営でもした日にゃ、亭主は当てにならないので、渡辺会長に隣に天文小屋でも建てさせて、星空観測ツアーを組んでドンドン稼いでもらおうしかない。有り得ない話だけど...

のんびりし過ぎると観光する時間が無くなるし、渡辺会長夫婦は済ませたということなので、遊びに行った亭主を待たずに朝食を摂るか、と準備をしていると、こういう時だけタイミングよく帰ってきた。まるでペンション経営の縮図を見ているようだったが、またそんな話になっているとは本人はつゆ知らず、何匹か釣れたようで、ガキのように嬉しそうな顔をして入ってきた。デジカメで撮って来た釣れた魚の写真を小さいモニターに映して、まずまずの満足度。まるで渡辺会長が撮影した天体

写真を見せてくれるながら「いいべ？いいべ？」と言っているのと似ている。どこの旦那も同じなんだなあ〜。でも、渡辺会長の場合は、写真をくださったりするが、趣味は趣味でも佐藤智秀の釣りの場合は、完璧に自分オノリーの為。んー、そこが違うか。

朝食はご飯、作って2日目の美味しいアラ汁・納豆・生卵・たくあん・牛蒡サラダ。どうして外泊先の朝食は、お腹に沢山入るのだろう？この日も例外なく、朝から充分満腹になった。そして、食後のコーヒーを飲んで一服して片付けた後、阪野テクニカル工房社長不在のまま阿寒方面へ観楓会らしいことをしに10時頃出発した。

これぞ、観楓会だ〜

コテージを出て阿寒方面に続く北見白糠線を走っていたが、目の前に広がる山々が色づいていて、美しかった。「まさしく観楓会だ〜。晴れていたら、もっと色が映えて綺麗だろうな〜」と言いながら、車を降りてカネラン峠で記念撮影。場所を移動して、道路の谷側に人が並び、反対車線に車を停めた。撮影した画像をチェックすると渡辺会長が「んー、今一だな。車の屋根の上に三脚組み立てる、佐藤さん」と言い、佐藤智秀は会長のご命令とあらばと、「よいこらしよ」と小粒の体を車高のあるサーフの屋根に上げた。セルフタイマーをかけ、屋根



カネラン峠側から見る阿寒連邦(右：雌阿寒 左：雄阿寒)



陸別から阿寒方面へ抜けるカネラン峠からみる紅葉に染まった山並み。みごとな景色に思わず記念撮影！

から降りて道路の反対側まで走って間に合うのだろうか、と一瞬心配したが、その心優しい残りの3人は、「タイマーかけて3秒数えてから走っていい、そしたら駆け足姿で画面に入る面白い写真ができるから。はっはっは」と提案した。しかし、佐藤智秀は意地でもまともな姿で写真に入るうとし、必死に走って冷静さを装った顔で写真に納まっていた。

その後、道道143号線の林道を走り抜けていったが、「カネラン峠ってどういう意味なんだろう」という話になった。もちろんアイヌ語での意味がちゃんと有るのだろうと思うが、親父ギャグを言いたくて言いたくてしょうがない、助手席に座っている大きな天文おじさんが「昔昔、きっと盗賊などが居る危険な峠で、『金要らん(カネいらん カネラン)から命だけはお助けを〜！助けて〜』と言って通った峠なんだな...きっと。フッフッフ」と満足げに言った。後部座席の女性2人は「さぶっ」といって相手にせず、窓の外を眺めては「あ、今真っ紅な樹が有った、綺麗〜。何かほんと紅葉(もみじ)狩りって感じだわ〜」と景色を満喫していた。上足寄から国道241号線に入って、徐々に阿寒方面に近づくと、観光バスが走っているのが目立つようになってきた。その中の一台を見て美香さんが「おばさん一杯乗ってるわ〜。でも、自分もオバサンだから、最近<お掃除のおばさん>とか言えないんだよね。ガクッ」と、貴重な発言。佐藤麻子も最近、われ先に地下鉄に乗ったら座ったりする図々しい女の人たちを見ては、「全く、これだからおばさんは困るよ。怖いよ...」と思いつつ、「自分もオバサンか...」と、ハッとしてガクッとすることがある。

そんなオバサンたちは車窓からの紅葉を覗いているうちに、いつしか「コックリコックリ」と、居眠りしていた。そして「キミたち、寝ている場合じゃないよ...」と、渡辺会長に起こされると、もう少しで最初の目的地「オンネ

トー」に着く辺りまで来ていた。11時ころには到着したが、さすが秋の連休中だけあって凄い混雑だった。狭い道と駐車スペースに人と車がごった返していた。しかし、振り返るとオンネトーの水面鏡が目に染みる美しさだった。看板を入れた記念撮影も、順番待ちだったが、何とか済ませ、景色だけの写真も撮影。便乗商売の、安っぽい絵を売る男もいたりして、観光をしている気分になった。ふとみると、渡辺会長が見知らぬオバサンとカメラを見ながら話している。また、旅先で年上の女性と気さくに仲良くなったようだった。大体満足して車を出してすぐに、チョッと目立たない別のポイントを見つけたので、降りてみることにした。するとそこには、看板のあるビューポイントよりも水面が更に美しく、水面鏡も輝いていた。渡辺会長も「さっきの、人がゴチャゴチャ居るところより綺麗だなあ〜」と言っている。勿論写真撮影もした。

オンネトーを出たのは11時30分くらい。そこから阿寒湖方面へ真っ直ぐ向った。樹々の紅葉が、赤い色は余り無いものの微かな色のコントラストが綺麗で、この連休中が見頃ではないかと思われた。乙女2人が紅葉狩りをして満喫していると言うのに、前の座席の2人は回りの景色そっちのけの、色気の無い話をしていた。目の前を走る何台もの自衛隊の重機関係車を見て盛り上がっている。それは少年だった。後ろの2人が何か言っても全く耳に入らないようだった。「これは灯油積んでるのか?」「ほー」「あ、こりゃ、牽引車だな」等々。「チョットー！父ちゃん坊やたち！今日は観楓会ですから〜！ネ」

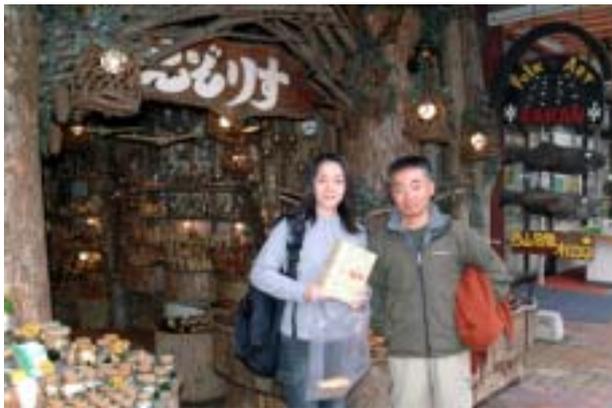
阿寒湖にて



エメラルドグリーン湖が無風状態で鏡のようになって湖畔の紅葉を映し出す。なんて綺麗なんだ！

20分も走らせると阿寒湖畔に到着した。フィッシング管理小屋の駐車場に車を止め、少し観光客気分を味わうために湖畔やお土産屋などを巡ってみることにした。10月8日から10日の3日間、『まりも祭り』が開催されているらしかった。まりも踊り・まりも御輿・まりもを湖に送る儀式などがあり、今年で55回目、渡辺会長が生まれる前から開催されていることになる。遊覧船乗り場近くのお土産屋に入ってみたが、相変わらずのお土産の品々が並んでいた。小さな毬藻の瓶詰め・マリモチゃんぬいぐるみ・キタキツネのキーホルダー・ひぐまグッズ…。道内なら何処でも売っている何の変哲も無いものばかりが店内を占領していた。

始めに入った店では、阿寒湖畔周辺の観光マップだけもらって出てきて、立ち並ぶホテルの表側、商店街へと移動した。そこが、「幸運の森商店街」「まりもの里商店街」という名前だということを知った。そのうち「幸運の森商店街」の方をブラブラする。ズラリと並ぶお土産屋は、お馴染みの木彫りの置き物が主役になっている。どこも同じようなものが並び、やる気の無い呼び込みや埃の掛かったキタキツネのキーホルダーを横目に、ただダラダラと歩いた。すると、工夫の無い店先ばかりの中、4人とも気持ちが悪くなるものを感じてある店に入った。品物をただ陳列しているのではなく、あまり見かけないオリジナルの物が多く、ディスプレイにも良いセンスを感じる店内で、つい何かを手にとってみたくなったのだ。そこは『えぞりす』という店で、「ここいいねえ、あ、これ可愛いねえ」と言いながら店内を歩いていると、凄腕っぽいお店のおばちゃんは話も上手く、佐藤家は「良いなあ」と言って見ていた木彫りのクリスマスツリーを買ってしまった。しかも密かにフクロウ好きの佐藤智秀は、ドアに掛けたり置いたり出来る小さな木彫りのフクロウを購入。両方にもの数分で名前と日付を彫刻刀で彫って入れてくれた。阿寒湖畔のお土産屋で買い物したのは、小学生以来か…。渡辺会長は「この店、なかなか良いよ。うん。他んところは並べ方が詰まんないもんね～。名前をすぐ彫るのも大したもんだ。でも俺は買わないよ…」と、褒めちぎり？おば様キラーの本領を發揮していた。



『えぞりす』前。観光地で珍しく買い物をした佐藤家の二人

昼も過ぎ、小腹が少々空いたので、「えぞりす」の向かいに有る「ホテル・エメラルド」に入った。1階レストランにはアジア系外国人の団体客がいて、従業員は忙しそうに動き回っていた。まだ到着していない団体もあるようで、テーブルセッティングはしてあるのだ添乗員と連絡をとり暖かいものを出すタイミングを見計らいながら準備している。団体対応で忙しく、私たちの食事はゆっ

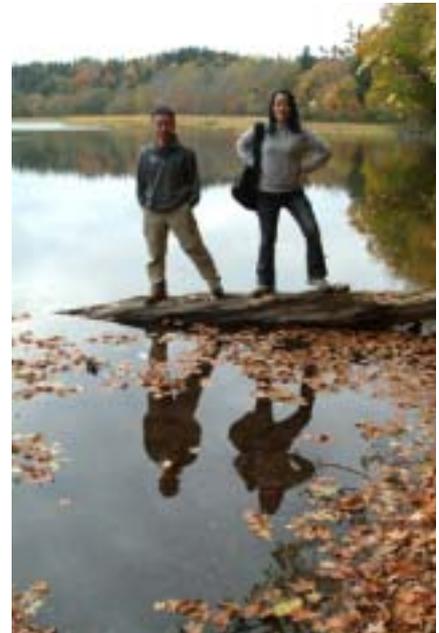
くり目に出てきた。ハラペコではなかったので、渡辺会長も「おっせえな…」と、イラついて言わなくて済んでいた。渡辺会長と佐藤麻子はホタテ丼。美香さんは中華丼。佐藤智秀は岩ます親子丼。ホタテ丼が意外な美味しさだった。刺身がのってくるのかと思ったが、ホタテの卵とじ丼といった感じの暖かい丼で、なかなかいけたのだ。美香さんは中華丼のボリュームに四苦八苦し、佐藤智秀は「まあまあかなあ～」とか言いながらペロリと平らげ、元々空腹じゃなかったみんなのお腹が満腹になった。

13次30分にはホテルを出発。観楓会の続きをしに、「パンケトー・パンケトー」に向かった。

渡辺夫妻、とうとう来たか？

国道241号線の阿寒横断道路を走って行くと、オクルシベの橋の上で川を覗く人々がいた。そこは阿寒湖の流れ出し、いわゆる阿寒川の源流で、静かな流れが紅葉に映えてなかなか美しいものだった。渡辺会長による撮影が終わった後、佐藤智秀推薦の阿寒の穴場…、どちらかと言うと、釣の穴場らしいが…、その「ひょうたん沼」に寄って写真を撮り、「パンケトー・パンケトー」に向った。

阿寒連山の紅葉の中を10分ほど走り駐車場に到着。4人は、老体に鞭打って階段を「よいしょ、よいしょ」と上り、二つの湖を望む双湖台にたどり着いた。「パンケトー」とは上の湖、「パンケトー」とは下の湖と言う意味だ。上の湖の姿は小さく見えるが、実際は下の湖よりもはるかに大きいということだ。



ひょうたん池でポーズをとる二人

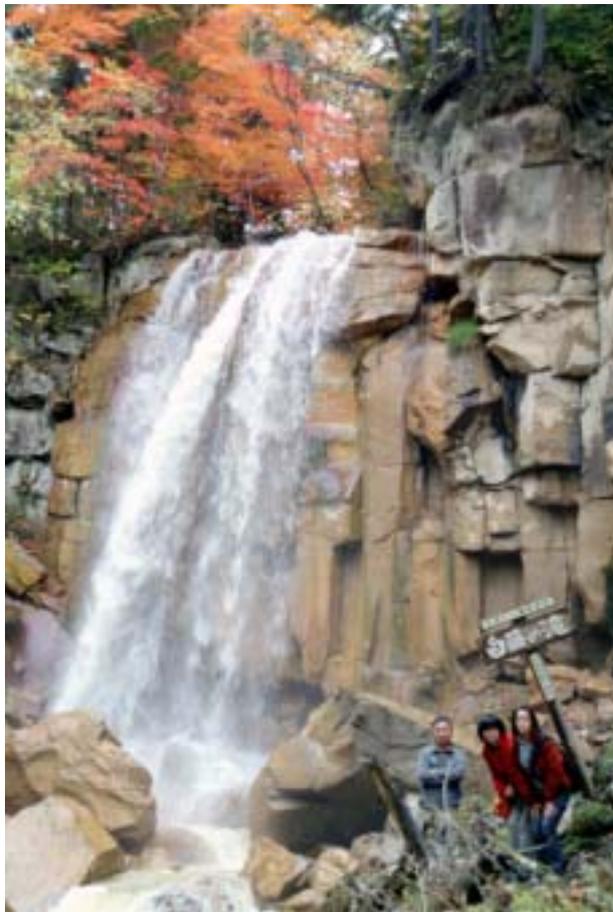
眼下に見下ろす湖畔には観光施設が全く無く、深～い森に囲まれた神秘的な雰囲気を感じさせる所だった。そこで渡辺会長に「しゃがまないと写真に湖が入らねえ」と言われ、ヤンキー座りで記念撮影。そしてふと横を見ると、手すりによしかかる彼女に後ろからベターっと抱きつく彼氏がいて、「まあ、こんなとこでよく出来るわ」と思って気持ち悪くなるくらいにベッタベッタ、イッチャイッチャをずーっとしていた。自分たちの世界に入っているようで、美香さんと佐藤麻子は暫く口を開けて眺めてしまった。美香さんに「美香さんたちはいつイッチャイチャするんですか～？」とふざけて聞いてみると、「お宅とお・な・じ。うふっ」とウインクされた。きゃー！美香さんが壊れた、とうとう脳にきたか、お宅と同じってどういうこと?! 13秒ほど脳みそが爆発した。

双湖台にいたのは15分くらいだったが、イチャつくカップルのためか、美香さんの「うふっ」のためか、余りの充実感でもう少しいたような気がした。駐車場へ階段



陸別からの日帰り紅葉ドライブは阿寒横断道路の双湖台辺りが限界か。ここから引き返すことにする

を降りていると「ペンケッパンケッペンケッパンケッ」と、リズムに乗った歌が聞こえてきた。それは渡辺会長



右の人物はかなり手前で、滝は意外に大きく立派だった

だったが、佐藤麻子が「もしかして、「出光」の毎度っまいどっ...のコマーシャルですか〜?」と、乗ってしまったのが悪かった。渡辺会長も切れてしまい、「そうそうそう! まいどっまいどっ、ペンケッパンケッペンケッパンケッ...」と一人陽気に階段を降りていったのだった。訳すと「上、下、上、下...」と歌っていることになり、何となく妙。夫婦揃ってとうとう脳に何かが出来てしまったようだ。

「上、下...」を出て陸別に戻る途中、30分くらい走ったところにある、「白藤の滝」に寄った。意外に知られていない。私たちが道路マップに記載されていた文字を見つけて初めてその存在に気がついた。どんなせこい滝だろうか? 樹々の向こう側から滝壺に落ちる水の音が「ゴ—ッ」と聞こえている。駐車場から徒歩で少し崖を下るようだった。パンプスなど履いていたら決して歩けないような傾斜の濡れた細道を、慎重に降りていくと、想像していたよりも遥かに立派な滝が姿を現した。

歩きタバコをしているマナーの悪いおじさんがいて「吸殻、ポイ捨てしないでよっ」と思い、一瞬興ざめしそうになったが、「隠れた名所が有るものだ」と、滝の姿の余りの立派さに感動した。滝と共に写真に納まり、さあ陸別に帰ろうと、慎重に降りてきた斜面を駐車場に向けて登ったが、「ヒーヒーフーフー、はーはーはー」という、ラマーズ法に似た苦しそうな息づかいが後ろの方から聞こえてきた。渡辺会長だった。とうとう産まれるか? と思ったら、「ケツ、上がらねえー! ひー!」と悲鳴を上げながらようやく上ってきた。日頃「俺って若いだろ?」と言っているものの、体力はやはり年相応。腕は細いが力持ちの川口さんがいたら、お尻を押してもらえたのに、残念でした。

こうして楽しい観光が終わった。金要らん? カネラン峠、人でごった返していたが美しいオンネトー、オクルシベの橋、地味だが知る人ぞ知るひょうたん沼、渡辺会

長には登りがきつかった白藤の滝。しかも、お土産まで買って、何年か振りに観楓会らしきものを味わった。

七輪で焼く『大七星会』

陸別のコテージに帰ってきたのは 15 時過ぎ、あとは社長の阪野文昭さんと倶楽部行事に久しぶりに参加の川口裕美さんを待つだけだった。天気が晴れる見込みが無く、観測出来る確立は限りなく 0 % に近かったので、『七星会』のための準備を早速始める。こここのところ、道新の文化講座の受講生さんと夜の活動(あ、変な活動じゃないよ、その工口い方)を共にすることが多く、天文倶楽部員だけの『七星会』は久しぶりなので、何だか新鮮な気持ちでワクワクする。外では男が火興こし、中では女が食材準備、と絵に書いたような分担作業が進んでいった。火興しでは、佐藤家のニューアイテムが登場。団扇要らずの手回しフイゴだ。一度使うと止められないほどの楽チングッズなのだった。

16 時頃に阪野さんと川口さんが到着した。阪野さんは陸別のコテージに来るのは 2 度目だが、川口さんは初めてなのだ。考えてみれば、彼女が母親になってから、初めての一人お泊り行事なのかも。たまには育児から離れて、こういう機会があっても良いものだ。体も益々細くなっていて、「母乳ダイエット」と言っていた。どうやら娘の桜来(さくら)ちゃんに栄養を吸い取られたようだ。そして、いよいよ阪野テクニカル工房



今回は新兵器、手回し送風機の登場！

観楓会 & 大七星会が始まった。朝も昼もお腹一杯食べ、しかもまだ 16 時半、全くお腹は空いていなかったが、少しずつゆっくり進めていこうということだったが、一度焼き物を始めると食欲がスピードアップするのは渡辺会長だ。焼き上がりと同時に、網の上から無くなって行く。渡辺会長専用のカルビも、美香さんが用意してくれたご飯と一緒に食べ「ん～、上手い！」と、体を揺らしてご満悦。昨晚から 2 人増えた嬉しさもあってか、何を食べても美味しくうにパクついていた。

七星会の途中、お酒が入っていて覚えていないが 18 時半頃か？、川口さんが行ったことが無い「銀河の森天文台」に、佐藤智秀・川口さん・佐藤麻子の 3 人で行った。



七輪を囲んで 6 名全員での記念写真

他のメンバーは、晴れる見込みが無いのでお留守番で、引き続き七星会で盛り上がる。雲の中、天文台に向ったが、入場券を買って驚いた。料金が値上げされていた。経営困難に陥りつつあるようだ。大人 300 円から一気に 500 円になっていたのだ。相当苦しいらしい。でも、毎晩開放し受付には女性が、親切な解説者 2 人が待機しているのだから、大したものだと思う。その晩も、曇っていたにも関わらず、口径 115cm 望遠鏡『りくり』を動かしてくれ、球状星団を確か 2 つ (M13 と何だった...かな覚えていない) や天王星を、もやっている中で何とか見せてくれた。その他見せてくれたものは、お酒の勢いで忘れたので、川口さんのレポートにお任せします。展望室から出て階下に降りてからは展示パネルを見たりパソコンを覗いたりし、川口さんは宇宙食を 3 種類くらいお土産に買っていた。後は覚えていない...

コテージに帰ってから、再び七星会を続行。お馴染みのナス・長ネギ・ししとう・玉ねぎ・酒の肴に抜群のイカゲソのゴロ焼き...。そして、渡辺会長夫妻に大受けだったのが、豚の唐揚げ。川口さんは、旦那さんの好きな豚肉を調理することが多らしく「酢豚の調理途中の肉だ～！」と敬遠していたが、美香さんは「これ、美味しい、はまった！」と言いながら、佐藤智秀調理の豚の唐揚げを「止められな～い」と言って、珍しく食べまくっていた。

阪野さんはいつもマイペース。淡々と飲み、淡々とつまみを突っ付く。昔から変わらないように、とてもホ



銀河の森コテージ『さそり』の前で全員で記念写真におさまる

ッとする。川口さんにはホッケの開きが登場。「待ってました！やった〜」と、その晩一番の笑顔で焼きたてホクホクを突っついていた。佐藤麻子も好きなバリバリ部分をお相伴に預かった。美味かった。後で気が付いたが、10月10日は川口さんの結婚記念日ではなかったかな？お祝いは、佐藤智秀が愛情を込めて焼いたホッケの開きということで...ご勘弁を...

渡辺会長夫婦はお腹が豚の唐揚げで一杯になり、眠気に誘われるままお先に部屋に戻って就寝。他3名はリビングに入り、佐藤智秀は焼き物疲れかテレビの前でゴロ寝し、阪野さん、川口さん、佐藤麻子はしばしくつろいだ後眠りに就き、阪野テクニカル工房観楓会、大七星会はこうして終わったのだった。

10月11日(月・祝)

観楓会が終了

新得町経由で帰札

11日の朝は、なかなか瞼が開かなかった。皆なが順次シャワーを浴びる音やリビングでの話し声を耳にしなが、ベッドの中でモゾモゾと布団にくるまって動いていた。ようやく起き上がってシャワーを浴びて一階に上がると、みんなそれぞれコーヒーを飲んだり軽くパンを食べたりしながら、ゆったりとした休日の朝のひと時を過ごしていた。居心地の良さに少々だらだらし過ぎたようで、チェックアウトの時間が迫ってから、6人の猛スピードで片付けをし出発の準備を進めた。

10時10分、銀河の森コテージを出発して新得町に向かった。阪野さんの車には渡辺会長が乗り込み、一気に男二人でむさくるしくなり、佐藤車には川口さんが乗って、佐藤智秀は女性3名を乗せたハーレム状態になった。新得町では阪野さんが仕事をするようになっており、全国各地から頼りにされる阪野さんは、「さすが！」としか言いようが無い。今回は、新得の保健センターでトレーニングマシンのソフトを交換するらしい。その新得町に近くなり始めた頃、美香さんのようすがおかしくなった。モゾモゾしている。すると「んー、トイレに行きたい。調子に乗ってコーヒー飲み過ぎた〜」と叫びだした。

阪野さんが仕事をする「新得町保健センター」にお昼過ぎに到着するまで何とか我慢をし、すぐさまトイレに駆け込んだ。女性3名はお陰でスッキリし、阪野さんは仕事、佐藤智秀はその助手としてセンターの2階へ上がって行った。外は残念ながら雨模様だったが、前の日まで晴れず帰りの日中だけ天気恵まれるのも悔しいので、許せる雨だった。そば降る雨の中、保健センター前の駐車場で待つことにした。始め、渡辺会長は阪野さんの車の中に一人でいたが、美女(?)3人が乗るサーフが気になるのか、運転席側のドアに肘を掛けて、手をトントントントン落ち着き無く動かしていた。そして、とうとう我慢しきれず、サーフの助手席に乗り込み、仕事中の2名を4人で待ちわびていた。車から見える保健センターの2階の窓越しに、作業中の阪野さんの姿や佐藤智秀の頭が時々見えていた。そして、仕事開始から1時間少し経ち、ようやく待ち人2人が保健センターから出てきたのだった。

その後、保健センターの職員から美味しい新得そばの

有名店情報を仕入れた阪野さんの案内で向かった。数分で目指す店を見つけた。「みなとや」という店だった。小雨を避けようと素早く店に入ったが、13時30分は過ぎていたにもかかわらず、店の中では客が沢山待っていて驚いた。到達するまでにそば屋は他にもあったが、やはりその「みなとや」が一番人気のようだった。カウンターやテーブル席、狭い小上がりのほかに、元は居住空間だと思われる奥座敷もあり、思った以上の人数が店の中にいた。客層が都会っぽい熟年夫婦だったり、若いカップルなのが気になったが、こんな田舎の国道から離れた店舗までひきもきらず来るところをみると、どうもドライブ中のガイドブックを頼りにした人たちだろうと想像できた。現に我々もそうだ。

2・30分待った後、やっと席につくことが出来た。渡辺会長と美香さんは「冷やしたぬき」、阪野さんは「天井」、佐藤智秀は「冷やしカシワ」、川口さんは「冷やし山菜」、佐藤麻子は「とろろセイロ」。蕎麦自体は、太い田舎蕎麦とまではいかないが歯ごたえがあり、まあまあ...美味しかった...かな。それよりもただせさえ、早食い渡辺会長と食事をする時は必至に食べなくてはならないのに、量が結構多くなかなか減らなかった。

食事のあと、「みなとや」の店舗前で記念撮影した後、14時30分には新得町を出発、札幌に向かった。そろそろ阪野テクニカル工房観楓会も終わりに近づいたようだ。日勝峠を越えて日高の道の駅からは、阪野車には川口さん、



最後の立ち寄り道の駅『樹海ロード日高』の看板

佐藤車には札幌出発時と同様の仲良し？4人組が乗り込んでいた。ひたすら走り、夕張から高速道路に入ってから後ろの座席で寝てしまったが、ハッと起きた時に通った料金所で、ETC搭載の阪野車がブイーン！といち早く通り抜け、「お先にバイバイ、ETCは良いだろ〜」と車の後姿が言っていた。こうして遙かなたに走り去って行った阪野さん・川口さんとは、そこでお別れとなった。ETC...強し...恐るべし。

佐藤車は17時に札幌南インターを通過、厚別の渡辺会長宅にVIPのお2人を送り届けた。こうして、阪野テクニカル工房観楓会は終わりを告げたが、観測が出来ないことを推測して荷物を減らし、4人一台の車で出かけたのは大正解だった。寂しいことに、というかいつも通り、天候に恵まれなかったのだから。しかし、純粋に観楓会を楽しむことが出来たのは間違い無い。

おわり

[編集注：前後しましたが、前号のデネブ56号の川口裕美さんの記事(8頁から)も参照してください]

九州は福岡，西日本鉄道(株)相談役の小惑星命名...

博多・天神・高千穂・矢部・柳川へ

2004年12月18(土) - 21(火)日

昨年9月に「宇宙の日」関連イベントで宮崎県へ行ったばかりでしたが、今度は12月に西鉄相談役の“大屋麗之助”さんの小惑星命名祝賀パーティに呼ばれて、博多へ行って来ました。ついでとってんは何ですが、九州の他の観光地も巡ってきました。会報の穴埋め記事になってしまいますが、読んでください。

渡辺 和郎



文楽の里で町興しする清和村の天文台，左から天文台員の花草清孝さん，佐賀の椋島富士夫さん，渡辺，顧問の宮本幸男さん

清和高原天文台

阿蘇山の外輪山にあたる“なだらかな南斜面”に位置するのが、清和村が運営する“清和高原天文台”です。この元台長がアマチュアで最初にシュミットカメラを自作された熊本の宮本幸男さんです。もう高齢(82歳)で、今回会わなければ二度とお顔を見ることもなくなるのでは？という思いから、高千穂行きを考えた時から、会いに行こうと考えていました。

標高が約700mという高原は遠くに九州中央山地を望める見晴らしの良い環境に建っていました。施設自体は1億円くらいといいますから、コンクリートの打ち放しとはいえこじんまりと小さくまとまっています。周囲にバンガロータイプの宿泊施設が5棟ほど建っていますが、この時期は利用がなく閑古鳥が鳴いている始末。経営がおもわしくないのか、小人数の予約は面倒なので断ってしまっているということでした。ごたぶんに漏れずどこも天文施設は厄介もの扱いのようです。清和村は文楽の里として町興し中で、立派な道の駅には『文楽館』



左が講話室で右の建物が事務所，上が天文台

なる施設も併用されていて、それら施設をまとめて財団化されており、その中に天文台も組み込まれてしまったということでした。職員も3人から1人に減られ、理解のない関係者に頭が痛いと言っていた花草さんは嘆いていましたが、今後どうなるか...。今、全国の天文施設がこういう

状態に陥っているようです。

天文台はスライディングルーフで開け放たれる設計になっていますが、やはり天文台というのは素人向けで夢を求める場所としては、円いドームにすべきと思いました。その事を伝えましたが、いまとなってはどうにもなりません。苗村鏡の口径 50cm の反射が鎮座していましたが、南阿蘇の私設ルナ天文台が口径 80cm ですから、ちょっと力不足の感が否めません。建物の周囲は芝生をはったゴルフ場のような広大な敷地があり、直接目に入る光源はないようです。浄化槽の蓋のような直径 2m ほどの円いコンクリートがいくつも並んでいるので、「あれは浄化槽？」ときいてみると、個人が赤道儀を据え付けて天体写真を撮影できるよう足場を良くしたサークルということでした。開館当時は、理想にもえているいろいろな天文趣味的要素を取り入れたんだなあ~という思いが伝わってきました。

ため息がでる話ばかりですが、先を急がねばなりません。凧あげをしていた宮本さんが、かみさんと一緒に遊んでくれました。挨拶して去らねばなりません。しかし、かみさんいわく「宮本さんは長生きするよ！」と言います。というのも、天文台下のなだらかな芝生を駆け上って来る姿は、とても老人には見えないというのです。

矢部の“通潤橋”

清和村からまた一つ峠越えをすると、次が矢部町です。国の指定重要文化財で豪快な放水で知られる、わが国最大の石造りアーチ水道橋『通潤橋』が有名です。灌漑用



谷間の小集落に巨大な石造りのアーチ橋が姿を現す

水を送るためにつくられたもので、矢部の総庄屋“布田保之助”が建設しました。深い谷に囲まれたこの辺りの白糸台地は水に乏しく、田圃の水はもちろん飲み水にも事欠く始末でした。人々の苦しむ姿をみた布田が 6km 離れた笹原川から水を引き、サイホンの原理を応用し、1852(嘉永 5)年 12 月から 1 年 8 ヶ月を要し建設したものです。

橋のたもとから登って橋の上に立つことが



通潤橋の上に立つ

できます。あがってみるとその巨大さが分かりますが、確かに両脇は橋より随分高くなっており、サイホンの原理を利用した巧みに感心しました。

国道 218 号線を西に進み、松橋 I.C. から九州自動車道に入り、福岡へ戻りました。本来なら鳥栖で下りて JR で帰らなければならない筈でしたが、今夜到着する東京の古川麒麟一郎先生が桜島さんに用があるというので、わざわざ福岡市内まで送ってくれるといいです。北上しながら久留米の辺りで周囲はすっかり暗くなりました。太宰府あたりで渋滞に巻き込まれる可能性があったのですが、事故車で少し停滞したくらいで順調に都市高速に入り、ホテルまで送っていただきました。

18 時 30 分に博多駅そばの JR ホテル福岡に戻るとロビーで福岡教育大学の平井正則先生が待っていました。今回の世話役です。4 人で古川先生が到着するのを待っていると、老体にむち打つようにフラ...フラ...と古川先生がやってきました。月光天文台の天文カレンダーを持ってきていました。桜島さんだけが佐賀へ帰るのに 2 時間はかかるというので帰宅、残った者で博多駅前に夕食にでかけました。

「何でも好きな物を食べて...」と言われましたが、さすがにフグをお腹いっぱい食べたいとは言えず、伊勢エビのサシミ(一盛 5,000 円?)で遠慮しました。焼き鳥や何やかんやでお腹はいっぱいになりました。

JR から西鉄のホテルへ移動

約束の朝 7 時に、古川先生の部屋に起床の電話を入れると、なかなか出ません。身支度を整えていつでも出られるようにしていたのですが、やっと電話口に出た先生は、不機嫌そうに「まだ寝ていた...」と言います。仕方ないので先に朝食に行って、食べ終わる頃にレストランに姿を現しました。昨夜は寝つかれず薬の世話になったということで、意識がまだもうろうとしているようでした。何とか用意してもらって、ホテルを出たのは 8 時になっていました。

荷物を持って、タクシーでひとまず博多駅前の「JR ホテル」から、天神の「西鉄グランドホテル」へ向かいました。朝のラッシュアワーなのか、地下鉄 2 駅分の距離にしては随分と時間がかかりました。福岡の中心街なのですが、林立するビルの谷間を車窓から垣間見ると、車や人の流れが札幌以上に活気が感じられました。「同じ 100 万都市とはいっても、ぜんぜん違うなあ~」というのが率直な感想です。というのも、福岡は JR 博多地区と私鉄の西日本鉄道の天神地区の二つの中心街があって、競い合っています。そもそも私鉄が成り立っているというのが凄いわけで、つまりそれだけ周辺都市がつながって人口があるということなのです。

今夜のパーティがこの西鉄グランドホテルで行われるので、まずは荷物をそのホテルのクロークへ預け、我々は“柳川”の観光にでかけることにしました。西鉄グランドホテルは、格式としては札幌でいうところの駅前通りの“グランドホテル”のような存在でしょうか。くしくも同じような名前です。

ホテルから繁華街のウラ通りを 2 丁ほど歩くと西鉄「天神駅」です。エスカレーターで 2 階にあがると始発駅特有のフォークのようなホームが現れました。3 番線から大牟田行きの特急に乗って「柳川」を目指します。この電車で 50 分ほどで到着する予定です。4 人掛けの対面ボックス席に座ると、混んでいるためおばちゃんが一

入ってピチピチ状態です。古川先生は窓にもたれて早や眠りに入ってしまった。

特急は市内を快調に南下すると、鈍行の停車駅を飛ばすように通過し田園地帯の郊外を走っていました。車窓の景色を楽しんでいると、かみさんも隣でコックリコックリしています。真冬というのに窓から入る日射しがきつく、夏のように暑くたっぷり汗をかいてしまいました。

柳川 4 代藩主の“御花”庭園

寝ている先生を起こして柳川(やながわ)のホームに立ちました。地方の小さな駅です。古川先生は最近とみに老齢となって歩くこともおぼつきません。先生の歩調に合わせて跨線橋をやっと登ると、駅側には幸いエレベーターがあったので、それを利用し助かりました。駅の出札を出たところで簡単なパンフを調達し駅前のタクシーに乗りました。最初に向かったのが、平井先生のお薦めの“御花”という庭園です。

柳川 4 代藩主の立花鑑虎が元禄 10(1697)年に建てた別邸で、明治の面影を残す西洋館と、仙台松島を模した日本庭園が有名です。ここは国の指定を受けた名園で、ぜひ見ておいた方がいいと薦められました。愛想のいいタクシーで柳川市内を 20 分ほど走ると、御花の前に着きました。先生は、「こんなドブ川のどこがいいのか分からん...」と言って、柳川の川下りには興味がありません。何せ、柳川で食べた“鰻の蒸籠”だけを楽しみに我々と一緒にやってきたのです。それが御花のそばにある老舗というので、いっの一番にやってきたのです。

御花の見学に興味のない先生は、入り口のベンチに座って待っているというので二人だけで見学することになりました。



西洋風建築の洒落た外観の“御花”

入場料 700 円で館内に入ると、古い旅館のような建物の中には、民具や古い資料、甲冑などの武具を展示するスペースになっており、矢印の道順にそって一通り見て歩きました。西洋館は雰囲気は道庁の旧庁舎そっくりでした。明治の面影を残す西洋風建築は、だいたい同じような感じです。大広間のような場所に出ると、その縁側の向こうに広い庭園が見えたので「はあ、これが平井先生が見ておいた方がいいといっていた日本庭園か...」と思いました。池を中心に銘石を配し、手入れのいきとどいた樹木で囲まれた庭は、見る人が見れば感動に値するものなのでしょうが、興味のない我々には見る眼がないので“ぶたに真珠”。広島「縮景園」や三島「楽寿園」のお仲間なのかと思ったところで、そそくさと退場してきました。



レストランのある新館2階のベランダから撮影した庭園

土産物売場をちょっと見て出たら、古川先生は小春日和の軒下のベンチでコックリと寝込んでいました。さっそく起こして、昼も近いので噂の“鰻蒸籠(うなぎせいろ)”を食べに行こうと誘いました。先生はそれだけのために我々と柳川まで来たのです。ところが、その有名な老舗の場所が思い出せないらしく、先生は我々二人を引き連れて、よぼよぼ足であっちこっちと探し歩く始末です。近所のお店で聞くと、周囲は鰻屋さんばかりで、どこが美味しいというより、どこもみな美味しいという返事だけで要領をえなく、ただ先生の記憶だけを頼りに歩き回りました。



「沖の橋」欄干の花崗岩に描かれた“柳川の舟下り”絵

平井先生が「この鰻蒸籠がうまい！でも一人前 3,800 円と高いけど...」と言っていた“本吉屋”の前を通り過ぎ、どこまでも歩いて行きます。「ここでもいいのになあ〜」と思っていると、北原白秋記念館に通ずる道筋にその老舗がありました。どこへ連れていかれるか分からず、ずっと後方で先生の様子を伺っていたので、「ここだ！ここだ！」と呼ばれた時は安心しました。その老舗は“若松屋”といいました。倉敷の“町並み保存地区”に似た、堀の両側に柳並木があって、古い商店街が並ぶ場所でした。

“若松屋”の鰻蒸籠に舌鼓

丁度、昼時とあって店内は混む間際でしたが、何とか椅子がけの席を確保して落ち着きました。蕎麦屋のようなたたずまいでしたが、老舗らしく高級感のある日本調の店内でした。愛想の良い仲居さんに、さっそく鰻の蒸

籠(せいろ)“上”を注文しました。暑いので瓶ビールを1本と喉を潤していると、ねんきの入った赤い漆塗りの重箱がやってきました。



柳川でも有名な鰻蒸籠の“若松屋”(上)、美味しい鰻重に大満足の渡辺美香(右)

簡単に言うと普通の感覚では鰻重なのですが、ご飯の下に竹編みの蒸籠が敷いてあり、たっぶりのタレの染み込んだご飯と鰻を蒸してあるものです。

これがふっくらとしていて、絶妙なタレ加減で美味しいのです。量もタップリでしたが残さずペロッと平らげてしまいました。

先生は直ぐにタクシーで再び柳川の駅に戻ろうと思ったらいいので、ここはせっかく柳川まで来たのですから「先生は駅で待っていてください。二人で舟下りしてから向かいます」と言うので、仕方なさそうに「しょうないなあ、それじゃ一緒に一緒するか...」とつきあってくれることになりました。若松屋の仲居さんに、「舟下りはどこから乗船できるか?」と聞くと、ちょうど店の前から逆コース(戻り)があるということでした。この辺りが舟下りの終着場らしいのです。店の前から堀の方を見渡すと、確かに舟が泊まっていた。まずは一人で行って「乗せてくれるか」と尋ねると、一人1時間コースで1,500円といいます。これはどれでも定額のようなのですが、一人では勘定に合わないのでも遠慮したいような顔つきをするので3人いると言うと、「いいよ」と言ってくれました。そこでOK!ということで、若松屋前から3人で名物柳川の舟下り(逆コース)に乗船することになりました。



おぼつかない足どりの古川先生が、揺れる舟先でよろけると、船頭さんがしっかり支えてくれました。結構、堀に落ちる客もいるそうで、そうなったら船頭さんの責任問題になるそうで、「一流の船頭は、絶対落とさない...」ということで、そこだけはしっかりやっているということでした。

気分爽快、「柳川舟下り」

長い竹竿を操って、ゆっくりと舟は堀を進み始めました。12月も師走、普段なら季節外れで客も少なくなる



一艘に3人の客という贅沢な舟下り

時期らしいのですが、今日は暖かく無風の小春日和で、船頭さん曰く「今日は異常なくらい暖かく、柳川でもここになく珍しい日」と言うことでした。

ゆっくりと、船頭さんの慣れた会話や解説で川面をすべってゆきます。「御花」の庭園周囲を回る格好で掘りを一周し、途中、地元の北原白秋や檀一雄碑を通過し、中心街方面へ向かいます。小さな橋では舟がやっと通過できるくらいの高さしかありませんので、その度に船頭さんが立ち姿勢から腰を落として低くなります。他の舟下りと何度もすれ違いましたが、どの舟も10人以上のお客が鮎詰め状態で、我々のような3人というのは珍しいようでした。お客が多いと舟も重くなって、けっこう力仕事でたいへんということでした。また、舟下りも会社化されており、6社で占有しており全部で300人くらいの船頭さんがいるということです。何人乗っても、給料制なので関係なく、中には団体でたたかれて安く乗せている舟もあるだろうということでした。

小春日和のような陽気に、足下は炬燵(こたつ)が入っています。先生は「青空が気持ちいい」と言って、途中から舟に横になって寝てしまいました。ゆっくりと流れてゆく周囲の景色を見ながら、こんなにゆったりとした気分になれたのは久しぶりだな~と思いました。すれ違う舟の客に向かって、自然に挨拶する雰囲気がありましたので、ついでに「鰻が美味しいですよ!」と自慢げに宣伝までしてしまいました。

小1時間ほどで終点到着すると、ちょうどそこにはワゴン車が待機しており、柳川駅まで送ってくれるといいます。うまくできたシステムだなあ~と感心してしまいました。確かに、駅から離れた乗り場まで、「送迎でもしてくれなきゃ、誰も乗りに来てくれないな」と思いました。

ほどなく、柳川駅に到着、ちょうど14:30の特急の到着5分前にホームに立つことができました。前日の高千穂行きとは違って、1日のんびりと過ごせた柳川観光で

した。

天神駅から徒歩でホテルへ向かい、喉が乾いたので1階のレストランでアイスクリームを食べ、部屋に落ち着いたのは16時頃でした。一度、うたた寝でもしてから夜の命名祝賀パーティに参加しようということでした。

小惑星「Oya」星命名祝賀会

早めにスーツを来て準備をしていると、遣いのマネージャが現れ、記念品を持って挨拶に来ました。すると、

平井先生から電話で、パーティの始まる前に大屋さんが挨拶しておきたいというので、会えないかというので、丁度身支度を整えていたので、直ぐに控え室へ向かいました。大屋麗之助さんは、現在西日本鉄道の相談役で、星を見るのが趣味ということでした。大屋「渡辺さんはいくつくらい小惑星を発見しているのですか?」と聞かれるので、渡辺「800くらいあります」と言うと、大屋「ふえ...」とビックリしながら、突然、大屋「嘘・八百...」と言い、一同ガクッ。あまりに意外なジョークを飛ばすので、すっかりなごんでしまいました。

お



祝いにかけてつけた大屋氏の友人たち60名で会場はいっぱいになった。命名の経緯を説明する平井正則福教大教授(右端)

控え室では、パーティが始まる前というのに次々お客がやってき、大屋さんに紹介されますが、どの方も名刺をいただくと会長だの社長だの、福岡の財界人トップの方ばかりで、はな垂れ小僧には別世界の人たちばかりでした。ありがたい政治家などはおらず、大屋さんの仲の良い人ばかりを厳選したということで、小僧を無視することなく、気の遣い方も一流なのは驚きました。適切な挨拶と質問攻めには感心しました。平井先生も確かな人脈にささり込んでいるなあ~と思いました。

パーティーへの参加者は福岡のロータリークラブの仲

問たちでもあったのでしょう。簡単なパーティーとはいえ寿司バーやローストビーフ・コーナーもあって本格的な食事やデザートも豊富で、しっかり2時間の予定を消化しました。御高齢な方々ゆえ、食材が残っていたのはもったいなかった。

大屋さんの奥さんもきさくな方で、昔から別荘や舟に星の名前を付けたり、星の見るのが好きで久住高原へ行ってたというお話を伺いました。平井先生のゴマすりのための命名かと思いきや、本当に星が好きな大屋さんの命名ができた事を知り嬉しくなりました。



会場は広告会社を取り仕切り、本格的なディスプレイも用意されていた。大屋麗之助氏(左)と共に

20時にパーティーは終了しましたが、平井先生と古川先生、西鉄エージェンシーの方々と中州へ繰り出し、久々に水割りやビールをご馳走になり、最後の博多の夜を夫婦で過ごさせていただきました。

翌日、午前の便で帰千歳しましたが、座席横にはダイエーの選手数家族と一緒にでした。女の娘が立ち替わり記念写真をせがんでいるのをしり目に今回の旅を終えました。



SAPPORO ASTRONOMICAL CLUB
札幌天文倶楽部
SINCE 1998

札幌天文倶楽部 会報「デネブ」 第57号

発行日 2005(平成17)年1月15日(印刷)

発行者 渡辺 和郎

編集委員 末澤朋代 今野利秋 川口裕美 神島麻子

印刷所 阪野テクニカル工房

発行所 札幌天文倶楽部 事務局

ホームページ http://technical-atr.com/wata_hp/newpage1.htm

〒062-0933

札幌市豊平区平岸3条13丁目1-16 佐藤智秀 方

電話 携帯080-1877-0306